



## わかろうとする姿勢

現代文で「わかろうとする姿勢」（鷺田清一）をやったと思う。ちなみに、私が現代文を受け持っているクラスでは、実習生の澤谷先生に詩をやってもらった関係で、先に「雪」とか「崖」とか「永訣の朝」を終わらせて、今週から「分かろうとする姿勢」に入ったところである。なお、その「永訣の朝」の授業の様子はホームページに載せてあるので、興味のある人は、授業の復習のつもりで覗いてみてほしい。

さて、その「分かろうとする姿勢」であるが、最初と最後の段落が対応しながら全体の枠組を作り、その「わからないんです」という発言をきっかけに、世間の常識的な「わかる観」に対して、筆者鷺田氏が自分なりの考察を提出する、という構造になっていることは見やすいだろう。もう少し詳しくいえば、世間の常識的な「わかる観」を第2段落で提出しておき、それをケアの現場の例や家裁での例を挙げながら相対化して、第7～8段落で自分なりの「わかる観」を提出しているわけだ。その際、「……ではなく、～～」という文型が使われていることにも注意しよう。評論文の読解では、この「～～ではなく」が一つの注目ポイントになるのは常識である。

さて、その「わかる観」だが、なかなか奥深いことが述べられているように私は思う。鷺田氏は、「わかる、理解するというのは、感情の一致、意見の一致をみるということではない」、「自他の差異を深く、そして微細に思い知らされることだ」と書いている。だから

からこそ「他者の理解においては、同じ思いになることではなく、じぶんにはとても了解しがたいその思いを、否定するのではなくそれでも了解しようと思うこと、つまり、そのわかろうとする姿勢にこそ他者はときに応えるということである」と続く。

\*

クラスで行事に取り組もうとすると、どうしても「意見の一致」や「感情の一致」、つまり「同じ思いになる」ことが求められがちだ。部活などでも同じことがあるかも知れない。つまり、学校というのは、常識的なわかる観が横行する場でもあるのである。

さらに、現代は情報化が生活の隅々にまで行き渡っていて、ケータイ・スマホなどといった「道具」を通して、同じ仲間になることが強要されがちな雰囲気がある。

こういうことは、意見や感情の一致している人には見えにくく、その一致についていけない人ほど敏感になる。しかし、学校という空間では、意見や感情が一致している人たちが多数派となるから、こうした疎外感は隠蔽され、無視されがちになってしまう…。

\*

あの文章の中に、「何がわかったの？と返したくなる」という一節もあって、そうだよなぁと同感した人も多いだろう（面接で担任から「分かるよ」などと言われても腹が立つだけに違いない）。あそこに書かれているような「わかろうとする姿勢」を、クラスの仲間に対しても持ち続けてほしいものである。